水面の魔女

プロインパクト

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある動画サイトで見た、ＭＡＤを元にして作っています。

オリジナル展開、オリジナル設定などなどあります。

不定期連載ですが、完結はさせますのでお付きあいお願いします。

目次

3 13
2 8
1 1

1

嵐の前の静けさ、という言葉がある
大きな問題事が起きる前には、不気味な程の静寂が訪れる、という意味だ。
「ワルプルギスの夜が来るより先に、厄介な事が起こるかもしれない」
天候は曇天、今にも雨が降りだしそうだ。暁美ほむらは、他人事のように話を聞いて空を見上げていた。
どんよりとした空は、まだ夕方というのに夜のように真っ暗になっている。
そんなほむらの様子を見てか、目の前のテーブルにちょこんと座っていた白い小動物、キュゥべえは、そのあまり変化しない表情のまま話を続ける。
「この魔女は、完全な異常（イレギュラー）だ」
「貴方がそう言いきるなんて珍しいわね、キュウベエ」
自前の艶のある前髪を弄りながら、ほむらはそう返した。
魔法少女への仲介役であるキュゥべえは当然、魔女の情報、対処方にもある程度詳しい。
インキュベータである彼、キュゥべえの事について人一倍知っているほむらにとっても、キュゥべえのその話は意外なことであった。
「今まで、こんな事態は無かったからね。出来れば早急に解決したい事でもあるのさ」
「……異常（イレギュラー）と言ったわね。具体的な被害予想は出ているの？」
勢力が強大な魔女であれば、それは何らかの形となって現れる。「ワルプルギスの夜」であれば、それは巨大台風（スーパーセル）という自然災害で現れていた。
分かりやすい相手であれば、それに対する準備も出来ると、ほむらは言外でそう言っていた。
「それは言えないよ」

「何ですって……？」
　返されたその言葉に、ほむらは無意識に拳を握り締めていた。そんなことを知ってか知らずか、キュゥべえは続ける。
「言っただろう？　今回の魔女は異常（イレギュラー）だって」
「観測者である僕たちでも、それがどんな魔女なのか、何処から発生した魔女なのかも分からない」
「それほどに、厄介な魔女なのさ」

◆

「イエーイ♪勝利のV！」
「今日もバッチリだったわね、美樹さん」
　所変わって、こちらは都内某所。いつも通りに夜のパトロールに勤しんでいた美樹さやかと巴マミは、使い魔を発見して退治していた。
　青を基調とした服に、白のマントを羽織った剣士を模した姿をしたさやかは、自らの武器であるサーベルをマントへと収納した。その隣にいる黄を基調とした
　服を着たゴシックドレス風の姿を模したマミは、ソウルジェムを片手に探索をしていた。
「さっきので終わりですよね？」
「多分そうだと思うわ。待ってて、今探知を――あら？」
　ソウルジェムで気配の探知を行ったマミが、探知した物へと視線を向けるのに釣られて、さやかも同じ方へと向いた。
　視線の先には、自分と同じ美滝原中学の制服を身に纏った、鹿目まどかの姿があった。
「お疲れ様です。二人とも、怪我は無い？」
　あどけない少女の様な笑みを浮かべるまどかに対して、さやかとマミの二人は数秒呆気に取られていた。

返事が中々返ってこないことに、まどかが内心焦り出すことと、二人のなかで何かがキレたのは、同じタイミングだった。
「え、えっと、二人とも――」
「鹿目さん、魔女の結界が展開されている間は、危ないから外出しないように言った筈よね？」
「それに、こんな人気の少ない場所で一人きりだなんて、なに考えてるの。変な奴に絡まれでもしたらどうするつもり？」
距離を詰めながら淡々と話してくる二人、そんな二人が怒っていることは、目を見ればすぐに分かった。
心の中であーだのこーだの、この場を安全に切り抜ける為の策を練るが、どれも通用しないことを感じ、まどかは潔く謝ることにした。
「ご、ごめんなさい。マミさん、さやかちゃん」
「許さないわよ♪」
「私も同じく♪」
許されなかった。御免で済むなら、警察は要らないのである。
越えてはいけないボーダーラインを踏み越えたまどかの両目に、徐々に涙が溜まりだしたのを見て、二人は軽いため息を吐いた。
「泣くくらいなら、最初からしなければ良いの！」
「そうだよ、まどかは後先考えなさすぎ」
自業自得だ、そう言いたげに自分を見つめるさやかとマミを見て、まどかは正直に言った。
「で、でも……。やっぱり不安だったから」
「……っ！」
「……。」
まどかのその言葉に、さやかは何かを言いたげにしたが、自分の前に立ちふさがるように出されたマミの腕を見て、マミに譲った。
大人しく引いたさやかを見て、安心したかのように微笑むマ

ミ。ここは任せて、と顔が語っていた。
「鹿目さん、以前に魔女の結界内に取り込まれたこと、覚えてる？」
「は、はい」
そう言われて、まどかはその時の危機的状況を思い出した。
「ど、何処なの？　ここぉ……」
どうしてこうなった。
その一言に尽きる状況に、鹿目まどかはパニックになっていた。
「初めまして、僕の名前はキュゥべえ」
「僕と契約して、魔法少女になってよ！」
それ―キュゥべえ―との出会いは、衝撃的だった。
偶々行った放課後のショッピングモール、頭の中に響いた声に従って進んでいくと、小さな可愛らしい小動物が居た。
叶えたい願いをたった一つ、どんな願いでも叶えるというキャッチコピーを引っ提げてやって来たそれは、まどかからすれば好奇心の的だったのだ。
「キュゥべえ、私と契約して」
あんな願いにしようか、こんな願いにしようかと、まどかがウンウン唸っている内に、結局はさやかが先に契約してしまった。
契約の証であるさやかのソウルジェムを見て、宝石のようで綺麗だ、と思ったのは今でも記憶に新しい。

「せっかく契約したんだからさ、魔女退治行ってみよー‼」
「お、おー！」
契約をしたのだから、後は実践。
ソウルジェムを片手に意気揚々と進むさやかに、まどかは胸を期待で膨らませながら、ついていく。

それで現在。
「さやかちゃーん‼　何処にいるのー‼」
二人で歩いていた路地裏の景色が少し歪んだかと思えば、見たこともない場所にいつの間にか立っていた。
目の前に居た筈のさやかも、何処かに行ってしまっている。
これはマズイ、とにかくマズイ。
普段鈍くさいと、家族や友人から言われているまどかでも、自分が置かれたこの状況には、全身から嫌な汗が止まらなかった。
今までの人生でも見たことのない奇妙な風景の中を、自分の直感を信じて進んでいく。

「――■■■■■■■■■■■‼」
「何言ってんのか分かんないのよー‼」
まどかとは別の場所では、さやかが一体の魔女と戦っていた。
見た目は大雑把に言えば、弓道着の様な服をを着た女性だ。身の丈は3メートル程、その丈と同じ程の大きさの弓を構えている。
ギチギチと嫌な音を聞いて、さやかは魔女の持つ弓に注目する。弓が大きくしなり、弦が風を裂く音を出した瞬間、さやかはその場から右側に全力で飛び退いた。
「っぉ……?!」
「■■■■■■‼」
数瞬遅れて、自分が立っていた少し後ろの地面が抉り吹き飛ぶのを見て、さやかの背筋が凍った。あんなものをまともに受ければ只

では済まないと思いつつ。
　またもギチギチと音をたて出した弓を見て、さやかは魔法で生み出したサーベルを片手に前へと進んだ。
「（コースは直線、放った瞬間に避ければイケる！）」
　戦って得た情報から、勝利への筋道を建てていく。
　地面を踏みしめ、魔女へと接近するさやかへと、死の照準が向く。
「（来た……‼）」
　成功するとは限らない、失敗した時のビジョンを浮かべる頭をブンブンと振り、魔女へと集中した。
　魔女の持つ弓が、ギチギチと音をたてる。
「（もっと）」
　彼我の距離はおよそ１０メートル
「（もっと）」
　ギチギチという音が止み
　魔女がニタリと笑った
「ここだァ‼」
　弓が発射でぶれた瞬間、さやかは魔力を使った高速移動で魔女のすぐ隣へと飛び込んだ。矢をかわされた魔女が視線を向けると、そこにはサーベルを構えたさやかが居た。
　一瞬の静寂の後、胴体を上下に分けられた魔女が地面に倒れる。苦しそうに肩で呼吸をするさやかは、サーベルを放り出して地面に座り込んだ。
「倒した……倒したんだぁ……っ‼」
　勝利した事を自覚するように、手を閉じたり開いたりする。次第にフルフルと体を奮わすと、歓喜の声を上げた。
「やったぁー‼魔女退治したぞー‼」
「お喜びの所申し訳ないんだけど、ちょっと良いかしら？」
　ふと掛けられた声に振り向くのと、振り向いた顔のすぐ側を何かが通り過ぎるのは同時の事だった。
　倒れた魔女の持っていた弓が破壊され、魔女の体が塵の様に崩

れていく。その後には、黒いゴルフボール状のアクセサリーが残されていた。

「魔女の中には、武器そのものが本体である場合があるわ。倒した気で居ても、また復活するわよ」

黄色を基調とした、ゴシックドレス風の服装をしたその女性は、硝煙を上げているマスケット銃の銃口を上に向けて言った。

「初めまして、私は巴マミ。貴女と同じ魔法少女よ」

服に合う、透き通る様な金髪をした魔法少女だった。

2

「こ、これ、夢だよね。あはは」

まどかは、ジリジリと迫りくる異形の者を見ながらそう呟いた。

なんでこんなことに？

誰か助けて

そんなことを思いながら、震えて動きにくい足に活を入れる。

なんとか体勢を立て直し、走って逃げようと動いた瞬間、足を何かに取られた。

見ると、足に異形の者がしがみついている。変形させた顔には、これまた肉を食いちぎるのに最適そうな牙が並んでいた。

ダラダラとヨダレを垂らすその様子に、まどかは全身から血の気が引いた。

「いや、嫌だよ！」

そんなまどかの叫びも虚しく、相手はこちらへとかぶりついてきた。

「何してんのよアンター！」

そんな怒鳴り声と共にやってきたのは、はぐれた筈のさやかだった。

隣には見たこともないゴシック調の少女がいる。

さやかは突っ込んで来た勢いをそのままに、異形の者へとサーベルを構えて突撃する。

異形の者、ここでは〝魔女〟と呼ばれる存在は、さやかへと噛みつこうとしたが、一歩遅く叩き斬られた。

魔女が消滅すると、空間がグニャグニャと歪み、見覚えのある町景色へと戻った。

「さ、さやかちゃん……」

「大丈夫?ごめんね、まどか。怪我はない?」
「ひゃあっ?!」
ペタペタと全身をまさぐるさやかに、まどかは驚きの声を上げて抗議する。
そんな光景を微笑ましく見ながら、もう一人の少女――マミはまどかへと言った。
「初めまして。私は巴マミ。貴女が、鹿目まどかさん?」
「は、はい」
「そう、間に合ってよかったわ。……、貴女は魔法少女じゃないの?」
魔法少女の持つ代表的な物、ソウルジェムの姿がないことを知り、マミが不思議そうに訊ねた。
が、さやかがまだ願いことを決めてないことを教えると、マミは納得が行ったように微笑む。
「ねぇ。良ければこれから、私の家に来ない?魔法少女のことについて知ってることを教えるわ」
夕飯も御馳走するわよ、と付け加えると、さやかは目を輝かせた。
「えっと、お邪魔じゃないなら」
「やりぃ♪お腹すいてたんだよねぇ」
「ふふ、なら行きましょうか」
マミの後ろをついて、二人は路地を進んで行った。

「――はい、覚えています」
あの時の恐怖も、嬉しさも、ドキドキも。その時感じたもの全て、今でも鮮明に思い出せる。

「そう、なら良かったわ。……鹿目さんが体験した恐怖は、魔女の結界に迷い混んだ全ての人が体験してるの、その迷い混んだ人を助けるのが、私達魔法少女の役目」

何も反応が無かったのか、ソウルジェムを指輪へと変型させると、

マミはこちらへと向き直った。
二人とも、魔法少女の姿から普段の見滝原中学の制服へと戻っている。

「でも……」
「心配なのは分かるけどさ、魔法少女の私達と、今のまどかじゃ全然戦力が違うでしょ、だから」
「なら私、魔法少女に――」

「ちょっと良いかしら?」

そう言いながらその会話に割り込んだのは、見滝原の制服に身を包んだほむらだった。
魔力を使ったのか、頭上のビルの屋上から落下して、ふわりと着地する。
それを見て、さやかが「かっけー……」と呟いていた。

「何かしら、暁美さん」
「最近、この近辺で変な波長を感じたことはある?」
「それって、魔女の波長ってことよね。……ごめんなさい、分からないわ」
「そう。……近いうちに、得体の知れない能力を持った魔女がこの見滝原に来るらしいわ。用心して」
「ね、ねぇ。ほむら。得体の知れない能力って、何なの?」
さやかの言葉に、ほむらは少し考えて口を開いた。
「キュゥべえが警戒しろと言うほどの魔女らしいわ。……最悪、ワルプルギスの夜クラスの魔女」
「ワルプルギスの夜ですって?!」

ワルプルギスの夜

超巨大台風であるそれは、一度都市を襲えば、その被害人数は想像を絶する魔女。

そして、暁美ほむらにとって、一番因縁がある魔女ともいえる。

「――えぇ。だから、何か変な魔女、または使い魔を見たときは、下手に刺激せず連絡を取り合いましょう」

「分かったわ。……しばらくは、個人での行動は止めておきましょう、美樹さん」

「分かりました。ほむら、アンタも気を付けなさいよ」

「言われなくても分かっているわ。……鹿目さん。先ほど聞き間違いかと思う言葉が聞こえたのだけど、それは私の勘違いであってる？」

立ち去る直前、ほむらはまどかへとそう訊ねた。

その言葉にまどかがドキリと跳ねるのを見て、軽いため息をつく。

「で、でも、私。このままじゃダメだと思って」

「それは前にも聞いた。そしてその答えに、『貴女のような甘ちゃんでは出来ない』と、答えた筈よ？」

「そ、そんなの、やってみないと分からないよ」

「分かる。現に今、私との会話に尻すぼみしてるのが良い例よ」

ほむらの言葉が、ナイフのようにまどかへと突き刺さる。

予想していたとはいえ、ほむらには口論じゃ敵わないとまどかは感じた。

「魔法少女は、さやかの様な短絡的な人間がお似合い。貴女のように、小さなことでウジウジと考える人は、すぐに死ぬわ」

そう言い残して、ほむらはふわりと跳躍した。ビルの壁を数度蹴り上がると、屋上へと消えていく。

「えへへ。私、魔法少女に向いてるって言ってましたね。ほむらの奴、やっと私を認めたのかな」

「……そうね、美樹さんは向いてると思うわ。物事を簡単に見れるか

ら」
後ろでそんなやり取りをしている二人の声が、まどかには遠い残響のように聞こえていた。

◆

「……何だ、アイツ」
まどか達より少し離れた場所で、今夜のパトロールを行っていた佐倉杏子は、見慣れないものに目を細めた。
食べていた板チョコを懐に仕舞うと、ソウルジェムの探知を作動させる。
「チッ、逃げやがった。……鏡みたいな奴だったな。この反応は使い魔か」
舌打ち混じりに、もう今夜は獲物はないなと立ち上がる。
少々の食べたりなさを感じ、腹部を抑えると目を閉じて思案する。
「マミの所で、飯でも食うか」
思い立ったがなんとやら、魔力を足に込めると、マミの住むマンションに向かって跳躍した。

3

「なんでアンタがこんなとこに居んのよ」
「それはこっちのだっての。ここはアタシのテリトリーだぞ」
「ここは私の家よ。佐倉さん」

その後、マミの家へと直行すると、我が物顔で侵入していた杏子と遭遇した。

マミの家にストックしているカップラーメンを啜って、杏子は言う。

「大体、お前らだって何しに来たんだよ、こんな時間に」

杏子の言葉に、調理器具を取り出していたマミが言った。

取り出している寸胴鍋からすると、パスタか何かを作るのだろうか。

「少し急務で話し合う事があったからね。佐倉さんが居たのは丁度良かったわ。……夕飯作るけど、食べる？」
「食べる。話ってのは何なのさ」

食べ終えたカップラーメンの器をテーブルに置いて、杏子は伸びをする。

「ほむらから、近いうちに得体の知れない魔女が現れるって聞いたのよ。だから、それの対策を考えようって」
「得体の知れない奴ぅ？はっ、魔女なんか全部そん――」

ピタリと急に動きを止め、真面目な顔をした杏子に、全員が視線を向けた。

「そういや、ここに来る前に変な奴を見たな」

杏子のその言葉に、全員に緊張が走った。

近くにいたさやかが詰め寄る。

「ど、何処で見たの?!」
「ちょっ、近い近い！確か、商店街の近くだったはずだ。探知をしたら

すぐに逃げたよ」
「そうなんだ……」
肩を落とすさやかに、杏子が怪訝な目を向ける。
何かあったのか？と言いたげな杏子に、マミが言った。
「その例の魔女なんだけどね、ワルプルギスの夜と同格かもしれないらしいの」
「……へぇ」
「だから、佐倉さんの見たソレは、もしかしたらビンゴかもしれないわね」
杏子の目に、獲物を前にした獣の様な、暴力的な気配をまどかは感じ取った。
ピリピリとした雰囲気でいる杏子に、マミは言う。
「ヤル気満々なのは良いことだけれど、こちらの準備も手伝って貰えるかしら？」
「おっ、出来たのか。なら食うとするか！」
「えぇ……、アンタさっきカップラーメン食べてなかった？」
「それはソレ、これはコレだ。旨いものは美味しくいただくのが、アタシのポリシーだからな」
「それはただ食い意地張ってるだけでしょ」

そんなことを言いながら、各々皿やコップなど、必要なものを用意していく。
皿に盛り付けられたそれを見て、まどかが声を上げた。
「わぁ、カルボナーラですか？美味しそう……！」
「ふふ、ありがとう。ちょっと私流のアレンジを加えてるんだけど、お口に合うか心配だわ」

心配なんて微塵もしてない、とまどかは思う。
炊事洗濯、文武両道、全てにおいて高い能力をもつマミは、まどかからすれば尊敬に値する人物だった。
こんな風に、〝時間を掛けずさらっと美味しい食事を用意できる〟

スキルは、まどかが会得しようと影ながら頑張っているスキルでもあるのだ。
「さぁて、さっさと食べようぜ。さっきから腹ペコだ」
「いや、アンタさっき――もういいや」
「量を作りすぎちゃったから、たくさん食べてくれるとありがたいわ」
「よーっし、任せろ！」
和気藹々と食べるその光景に、マミは自然と頬を緩ませていた。
次は、ケーキでも作ろうかしら。
そんなことを考えつつ、パスタにフォークを突っ込んだ。

???
「君は混ざらないのかい？」
「私の後ろに立つとは良い度胸ね、キュゥべえ」
「凄腕スナイパーの後ろに立った覚えはないよ」

ビルの屋上、マミの家の様子が見れる場所にほむらは居た。
こちらから見える様子には、丁度まどかがパスタを食べているところだった。
「それで、奴は見つかったかい？」
「隠れんぼの上手な奴ね。さっきから使い魔が現れては消えてる……。誘っているのかしら」
「さてね。こちらとしても正体不明の存在だ。慎重に接触するのをオススメするよ」
特に用事は無かったのか、それだけ言うとさっさと消えてしまった。
まどかに近付かないように釘を刺すべきだったかと思っていると、先ほどから続けている探知に反応が出る。
「……そうよ、こっちに来なさい」
ほむらはそう呟いて、自らの武器である盾へと手を伸ばす。
そこにある収納ボックスから、拳銃を取り出した。
次第に近付いてくる存在に、イメージトレーニングをしながら待っ

ていると、突然反応が消えた。

そして反応は、自身の背後に出た。

「――ッ?!」

突然のことに、驚いて反応が遅れる。体勢を立て直しながら振り向くと――

そこには自分が居た。

「……え?」

ゴォーン、ゴォーン、と。

もう一人の自分の隣で、大きな姿見を構えた天使の様な使い魔が鐘を鳴らす。

その鐘の音に反応するように、もう一人の自分、暁美ほむらは起き上がった。

「何よ、コレ。まさか、この魔女は――」

「ハジメマショ、ワタシイ?」

その言葉と同時に、もう一人のホムラの盾が起動し、ほむらの意識は闇に落ちた。